☆☆☆☆☆☆☆　スパーキングナイター開幕しました！　☆☆☆☆☆☆☆

川崎競馬倶楽部

15・・　・・・・・・・・・・・・　http://www.kawasakikeiba.com　since1990

〒212-0002　川崎市幸区小向仲野町１５－４ 川崎競馬倶楽部　　２００５年３月号

酒井忍騎手☆１０００勝達成

３月２日浦和競馬最終レースでアタゴトルネイドに騎乗した酒井忍騎手（八木仁厩舎）は通算１０００勝を達成した。「連勝していた馬でもあり予感はあったが、ホッとしたというのが正直なところ。自分にとって１０００勝はあくまでひと区切り」と騎手として通過点であることを強調した。平成３年４月６日三条競馬でのデビュー以来８，６８８戦目のことだった。

写真協力　柳原プロダクション

「騎手として次は２０００勝を目指したい。そして南関東でリーディングの３本指に入る存在になりたいですね。この壁は厚そうですけど‥」

さっそく次なる目標を掲げ、ますます意気盛ん。昭和48年月18日新潟県豊栄で生まれ、父の正男さんが県営新潟競馬の厩務員であったことから厩舎で育った酒井忍騎手の生い立ちから遡ってみよう。

「長男が正充で次男が忍そして三男がJRAで騎手をしている学。忍は2800gで生まれた小さな子だった。『忍』にしようか『勇』にしようか迷って『忍』と名付けたんだ」と父の正男さんの口からまずは誕生秘話。

「とにかくヤンチャ。いたずらが好きで一人で遊んでいても何をするか目が離せない子供だった」という。

「馬はいつもそばにいたから自然なことだった」と小学五年生から乗馬クラブに通った。

成績は芳しくなかったが運動神経は抜群、中学校の担任教師もそう評した少年時代。「中央の騎手になるのかと思ったら『こっちでいい』って。まだ景気のいい頃でまさかつぶれるとは思っていなかったからね。弟の学はいつも忍にべったりだったが、『絶対JRAの騎手になる』って小さい頃から言ってたね。昔、私も騎手になりたかったが目が悪くて諦めていたから息子がジョッキーになった時にはホント嬉しかった」。しかし中学を出ると厩務員になった。「いきなり騎手になって甘えないように」と河内義昭調教師が計らうくらい気持ちが不安定になっていたからだった。河内調教師はJRAの河内洋調教師の叔父に当たり有力馬がたくさんいた。父の正男さんもここで厩務員をしていた。

「騎手をあきらめていったんは厩務員になりました。一年間でしたが、この間にいろいろ考えてやっぱり騎手になりたいと心を入れ替えました。この遅れた一年も今となっては良い勉強でしたね」と振り返る。7つ下の弟・学さんはJRAで騎手になっている。

平成3年4月6日三条競馬での騎手デビュー。「デビュー戦のことは良く覚えています。ぜんぜんケツの方でしたけど。初勝利は二番手にいていったん差されてまた差し返すレースでした。新人らしくない騎乗をすると言われていました。新潟のことは楽しいことばかり思い出しますね。河内厩舎は乗り馬に関してもかなり厳しかったですが、今となっては有り難いことです」。新潟時代には673勝という勝ち鞍をあげ、リーディング上位を争っていた。イブキクラッシュでの朱鷺大賞典や新潟記念、セカンドゲスでの栗駒賞などを重賞を20タイトル制している。調教師引退により厩舎が解散になったことを機に「自分自身を試してみたかった」と南関東での騎乗希望。田辺陽一調教師の同期生が新潟所属にいた縁で八木仁厩舎に所属することが決まった。

心機一転という気持ちで勝負服を青一色に変更。

実はこれには南関東の勝負服の規定にこれまで来ていた袖の縞が使えなかったという裏事情もあるのだが、ドバイのモハメド殿下の勝負服を意識して決めたものだ。

平成13年2月9日付で川崎に移籍したが4ヶ月間は規定で騎乗を許されなかった。ハクシュウメガミで川崎初勝利を飾ったのは7月8日だった。

「南関東は頭数も多いし、思い通りにレースを運ぶのは難しいと感じたが、キングセイバーでダービーを勝てたこと、出るだけでも大変なことなのに最高のチャンスになりました」。一年たたずして東京ダービーを制覇。平成16年にはベルモントビーチで交流重賞マリーンCを手にした。

父の正男さんも新潟競馬廃止と共に八木仁厩舎にやって来た。

「グレイトローマンやハヤトセンターで皐月賞、ダービー、青山記念という新潟三冠や三条記念。新潟時代も親父はいつもスゴイ馬ばかり担当していて自分に騎乗チャンスはなかった。お互いに重賞を勝っていても親父の馬に俺がのって獲ったことがないんです。ぜひ実現したいです。スコーピオンリジィもいるし、レッドバイオリンという馬も可能性を秘めています。二歳も良い馬が来てますよ」。もう一つの夢を語ってくれた。

「まるで二重人格のようだね。レースに乗っているときと普段が全く違う。普段あんなに温厚な人間がレースには厳しい。レースが終わった検量室でたとえ乗り継ぎで忙しくても必ずレースを見直してチェックする。レースで自分が納得できないときは悔しさを露わにするからね。プロ意識の高さだと思う。馬場に出たらジョッキーに任せるしかないが、安心してみていられるよ。うちに来て4年になるがプロ根性が増してきているようにも感じる。勝っても負けてもレース後必ず馬に愛撫してねぎらう。常にみんなに支えられているという意識を忘れていないんだろうな」と八木仁調教師もいうように愛馬心ある穏やかな一面と、もう反面に秘められた勝負師としての魂。酒井忍騎手の真骨頂はそこにある。

えっ、そんなとこからありえない～！

豪脚炸裂ブルーローレンス

昨年4月、無傷の5連勝でクラウンカップを制したブルーローレンス。東京ダービー、黒潮盃で敗れたもののその後も休むことなくコンスタントに月1回のペースで走ってきた彼は心身ともにたくましくなり2度目の重賞制覇。直線一気の末脚で馬群を捌いた。

＜足立勝久調教師＞
「この馬には血統的にも１４００mか１６００mが妥当だから使いたいレースでした。昨春のダービー時は調子は悪くなかったものの、ソエも重くはないが出ていたし使ったあとの反動が大きいタイプで思い切った調教はできなかった。今は回復が早くなって筋肉、体力、精神面においても強くなり調教にも耐えられるようになりました。もともと素直で飼い葉食いもよく手がかからないしレースもうまい、モエレトレジャーと似たタイプです。

レース前に的場騎手から「今日は思い切ったレースしますから」といって控えるレースになった。4コーナーから外に出す技術、タイミングはさすが的場騎手と思う判断でした。昨年１１月に浦和で控えるレースをして馬が応え今レースにつながった。次走はマイルグランプリを予定。今後も月一回のペースで調整していきます。」

＜富士木和男厩務員＞
「うちに2，3頭速いのがいたのでハナから抑えて上がり2ハロンにかけるとパドックで的場騎手と話していました。爆発力があり瞬発力勝負になっても大丈夫なのは浦和で経験済みだったので4コーナーでまだ後ろにいても心配はしていませんでした、そこから馬群をさばいたのですから立派です。具合は最高のコンディションで何もかもがぴたりとあった、競馬はドラマです。レースを終えても状態は変わらずによく、あれだけのレースをした後も感情を表に出さず普段と変わらない表情でした。自分自身はあくまで今回は挑戦馬の立場でしたのでみていてどきどきはしていませんでした。さらに上を狙える要素はあるので秋の大きいところ目指して馬の状態を整えていきたいです。土台がしっかりしていれば結果は後から必ずついてくるものですから」

写真協力　柳原プロダクション

父　シャンハイ　　　牡　４歳
母　モガミヒカリ　　馬主　　黛　大介

＜的場文男騎手＞
「こんな良い脚を使うとはねぇ。この相手関係では前に付けられないだろうと思い中団後ろの位置に付けたんだが、ペースはそう速くなかったね。4コーナーでの手応えがあまりに良かったんでひょっとするとと思った。距離も血統の割にこなせそうですよ」